

1970 年代～80 年代におけるヴァナキュラーという概念の諸傾向に関する研究  
—現代に流れるその思想を考察する—

Study on various tendencies of the vernacular in 1970's and 1980's  
-arguing the current of vernacular in the present time-

田所辰之助<sup>1</sup>, ○雨宮大樹<sup>2</sup>  
Shinnosuke Tadokoro<sup>1</sup>, \*Daiki Amemiya<sup>2</sup>

Abstract: postmodernism holding up anti-modern have arisen for a half century. How this ideology going still? As a general opinion, this current end in failure and architectural idea is on chaotic. But I thought postmodernism is still spreading among the architects, or more specifically, the vernacular as an idea. Vernacular architecture is widely known by “architecture without architect” in 1964. For the following, various architects searched vernacular architecture, and interpreted vernacular diversely. For this reason, this study intends to argue effectiveness of vernacular as an architectural idea in our time. Research method is that creating the chronology of vernacular goes down from 1970 to 1990 referencing various articles contributed to Japanese architectural magazines.

### 1. 研究背景

1970 年ごろ、近代に対する疑念から脱近代が掲げられ、建築の分野ではチャールズ・ジェンクスの『ポストモダニズムの建築言語』によってその思想が定着したが、それは様々な建築言語をアイロニカルに引用する急進的な折衷主義であったため批判も多かった。一方で、ほぼ同時期にチャールズ・ムーアの《シーランチ》やロバート・ヴェンチャーリの《母の家》といった〈草の根〉と呼ばれる建築家たちの作品が誕生した。これは『建築の多様性と対立性』で述べられているように近代建築の純粋主義を否定し歴史性、地域性という視点を再びとり入れようとする運動として捉えられた。また『建築家なしの建築』では人の手から離れた自然の摂理による美を表現している民俗固有的建築や集落が取り上げられ、大きな影響を建築家に与えてきた。こうしたアメリカの〈草の根〉の建築や『建築家なしの建築』の影響によって起こった運動は〈ヴァナキュラー〉(vernacular)という思想に関するところが大きいようである。

### 2. 研究目的・方法

脱近代を掲げた思想的転回から半世紀ほど経った現在、ポストモダニズムは失敗に終わり建築思想は多岐に渡るようになり主題のない混沌とした時代であるという見方が強い。そんな時代にあってヴァナキュラー思想は未だに建築家に影響を与えているのではという思いから、本研究に至る。

研究方法はヴァナキュラーが建築分野において認識されるようになったポストモダニズム以降、特に

1970 年代～80 年代にかけて都市住宅、SD、新建築、a+u といった建築雑誌に寄稿されたヴァナキュラーに関する論文や建築作品を年表にまとめ、ヴァナキュラー思想・建築の年代による諸傾向を明らかにする。

### 3. 同時代性志向のヴァナキュラー<sup>1)</sup>

「ハイスタイル（高尚な）の建物は、通常ヴァナキュラー（土着の）な母体との関係、というかその脈絡の中でとらえられなければならないし、事実この脈絡を外れると、このハイスタイル建築というものが理解できず、とくにこれらがデザインされ、建てられた時代でのありのままの姿に至ってはまったくわからなくなってしまふのである。」<sup>2)</sup>

このラポポートの言葉を借りればベンチャーリやムーアに代表されるアメリカの草の根派はヴァナキュラーな母体のもとで新たなスタイルを確立したと考えることができる。そこにはシングル・スタイルとアメリカ大衆文化のもとで誕生したポップアートとの融合がみられるからである。ポップアートとは既製品をそのまま使うレディメイドや写真を切り貼りしたコラージュといった手法を用いた表現行為である。これを建築手法に転じてムーアやベンチャーリは（近代建築的な）〈引き算〉の建築に対してヴォキャブラリーを増やして感性を豊かにする〈加え算〉の建築という考え方をしているのである。つまり、ここでいう同時代性志向のヴァナキュラーとは単純なシングル・スタイルへの回帰ではなく、ポピュラー・カルチャーを取り入れたハイスタイルな建築だと言えるのではないだろうか。

1：日大理工・教員・建築、2：日大理工・学部・建築

#### 4. 実質的空間志向のヴァナキュラー<sup>11</sup>

実質的空間志向のヴァナキュラーとは前近代の建築への回帰を志向することであり、その点で同時代性志向のヴァナキュラーとは時間軸の方向が逆である。そして風土に根ざした自然発生的建築を意図して実現するためにそのプロセスに重点がおかれる。

モントリオール万博の一環として建てられた《アビタ' 67》(モシェ・サフディ) は地中海の集落のような多様性と非画一性を持った様相を呈している。メガストラクチャーにプレファブの住戸がぶどうの房のように取り付けられる仕組みになっている。モシェ・サフディはヨーロッパ伝統の街並みの中にみられる中庭とかドーム、ヴォールト、壁を〈スペース・メーカー〉と呼び、ある一定のストラクチャーによってそれらが互いに結合し〈反復〉されることで集落のような自然発生的建築が可能になると考えている。

《ルーヴァン・カトリック大学医学部学生寮》(ルシアン・クロール,1976) はストラクチャーとインフィルから構成される所謂 SI 住宅の仕組みを取り入れ、特にインフィル・エレメントは住民自身で組み立て可能になっている。SAR モジュールを用いて開かれた建築とすることで住民参加を促すのである。住民が容易に建築に手を加えることができる複合性もクロールが設計した建築が多様性を見せる理由のひとつである。《バイカーの集合住宅地》(ラルフ・アースキン,1969-81) はスラムとなっていた敷地を再開発するという形で建設された。その過程で、設計事務所を敷地内に設け住民たちと意見を交わしやす工夫がなされた。

#### 5. 近代化というアノニマス化

バーナード・ルドルフスキーが著書『建築家なしの建築』で示した未知の建築は民族固有の建築は作家性が建築に表現されることがない。つまりアノニマス性はヴァナキュラーの原理のひとつともいえるだろう。

「確かにルドルフスキーが示す未知の建築は、そのものとしては見事なものである。しかし、そこにおけるアノニマス性と、現代われわれが直面しているアノニマス性とは根本から異質なものだ。先にも触れたように、現代のそれは、何よりも、産業、工業文明を経て、巨大なテクノロジーとメディアを介在としたアノニマス性であり…」<sup>12</sup>つまり、アノニマス性とはテクノロジーの分野ではプレファブ리케이션や大量生産による建築の均質化や非一品生産化、メディアの分野ではテレビ・新聞の影響による人々の均質化つまり大衆化のことだと解釈できる。つまり、ヴァナキュラーを志向する建築家がとってきた手段は〈作家主義的態

度の否定〉と〈技術主義的傾向〉によるアノニマス性の獲得であるという見方もできる。

#### 6. 結論

同時代性志向・実質的空間志向のヴァナキュラーは大衆文化やテクノロジーを援用、つまり作家主義的態度の否定や技術主義的傾向を示してきた。それは近代化を享受しなければ実現できなかったことでもある。近代主義建築に対する反動からヴァナキュラーという概念が援用され新しい知的射程の獲得が試みられたが、その原理であるアノニマス性は近代建築の中にすでに実現されており、ポストモダニズム以降のヴァナキュラーなる運動はそこに主体性が強調されたに過ぎないのではないだろうか。これは、近代主義建築のポピュラリゼーションであったということでもある。一方で近代主義建築にはヴァナキュラーという概念が流れているということになるのではないだろうか。実際、この仮説はデル・アプトンとジョン・マイケル・ヴィラチによって指摘されている。「〈ヴァナキュラーアーキテクチュア〉という概念に新しい視点を盛り込むことによって、それを単なる伝統的な民族家屋をさす用語から、建造物を巡る形式や技術を通して近代の歴史的過程の深部へと探りを入れるための理論的概念へと進化させた。」<sup>14</sup>。ヴァナキュラーは近代建築に対する批判材料として、ポストモダニズム以降特有のテーマと位置付けられているが、そうした反近代的なニュアンスとして扱われていることに対しても今後、疑問を投げかけたい。

#### 7. 参考文献

- [1]早川邦彦『土着の思考』a+u 1976年6月号 pp.19-32
- [2]アモス・ラポポート『住居の形態と変化』都市住宅 1973年11月号 pp.16-19
- [3]森岡侑士『建築・都市・アノニマス-レオナルド・リッチにおけるアノニマスの概念』都市住宅 1969年1月号 pp.59-62.
- [4]今福龍太『クレオール主義』ちくま文芸文庫 2003年
- [5]ロバート・ヴェンチャーリ、(訳)伊藤公文『建築の多様性と対立性』鹿島出版会 1982年
- [6]ルシアン・クロール、(訳)重村力『参加と複合-建築の未来とその構成要素』ふるまい大学系 1990年
- [7]原広司『空間〈機能から様相へ〉』岩波現代文庫 2007年

([8] 年表資料参考)